

定し、壕つくりをさせました。

住民は、避難地の壕に食糧をたくわえて、いつでも避難できるよう準備をしていました。

そのころに、初めてグラマン八機による空襲がありました。昭和二十年になると、空襲は激しくなりました。その中でも重員として毎日作業させられました。二月頃に、軍から避難命令が出て、部落の女、子ども、老人は、避難指定地の祖納岳、ハテロマ森に避難しました。

部落の働く男子は、軍要員として部落に残されました。軍は住民に対して食糧の供出を命じていました。

空襲が激しくなっても避難用の食糧に対して軍は容赦なく徵發し、命令で米を部隊へ持ち運ばせました。

このころから、食糧は不足がちでした。食事は、朝早く準備し、十日分つくっていました。準備できなかつた時は、その日の夜までひもじい思いをしなければなりませんでした。

避難生活でつらかったことは空襲時に子どもが泣くことでした。泣く子は壕の外へほうり出せ、とみんなに怒鳴られ、叱られました。子どもが泣けば、飛行機に見つけられ空襲をされるので、泣く

子をあやす母親は、口に手を当てたりして泣かさないようにすることに精いっぱいのことをしていました。

それから、困難なことは、お産でした。お産は、壕でさせず田小屋にはばさんと行ってやつていました。お産をしがいられない者は、産婆の経験のある者にお願いし、お産をし

薬もなく、医者もおらず、以前からあつた西表島マラリア防護所の職員では何もなりませんでした。

熱のさがつた者は、ヨモギ、ニガナ、サクナ、バショウをせんじて、その汁をマラリア患者に飲ませて一時の熱をましにしたことが精いっぱいの治療でした。

食べる物もなく、マラリアでうなされ、熱がさがつた者が食べ物をさがしてくる、病人の頭を水でひやす……このような状態が長く続ければ部落全員が死んだでしょう。

ところが、西表島マラリア防護所の職員が稻葉で當林署の造林地にキナ樹を発見し、その皮をはぎとり、三枚鍋にキナ樹の皮と水を入れて煮、この煮た汁に水一斗、稀塩酸、苦味チンキを加えて沸騰させ、これを各戸に廻つてマラリア患者に湯呑み一ぱいを強制的に飲ませました。

このことが二週間も続く内に、マラリア患者はよくなり、マラリアの犠牲者をだすことがなく、その後、各部落へキナ樹の皮を配りました。そのため西表島でのマラリアの死亡者がたいへん少なかつたのでしょう。

マラリアが猛威をふるった終戦直後、軍へ薬をお願いしたが軍でも手持ちの薬がないといってことわられました。軍の方でもマラリア患者はたくさんいました。

島外との通信、交通の途絶えた中で、マラリア患者の治療と食糧をがしをやるだけで精いっぱいでした。

十二月二十五日に初めて、米軍が来ました。日本軍の武器、弾薬をとり上げ、海へ捨てました。その時に、日本軍の壕に、たくさん

ていました。中には自分一人でお産した人もいました。

終戦まじかになると、避難所の食糧も不足をきたしやせおとろえばかりでした。

八月十五日、護衛隊の隊長が部落民を集めて、終戦を知らせてく

れました。

避難所への知らせは、部落の者がしてくれました。部落へ帰ろうとしたら、軍が部落へ帰るな、という命令をしたが、一人逃げ二人逃げで、とうとうみんな帰つてきました。

避難中に持つていた食糧や種モミ、とつてあつた保管米も、みな食べつくしておりました。部落に帰つた時には、栄養失調と疲労困憊しておりました。部落に帰つても食べ物もなく食べられるものは何んでも取つて食べました。ヘゴ、マーニ（くるつぐ）、クバの芯、アザミのイキ、ツノマタ、ギライラ（シャコ貝）、カチチ（ウニ）、ゆりの根、特にソテツは多く食べました。ソテツは切つて箱につめぐらし、つつき、布にほしてアクをとり、そして食べました。

食糧難の上に体も衰弱していたので、マラリアに殆んどの者がかかりました。

マラリアは避難中からかかっていた者もいましたが避難から帰つて来てからひどくなりました。

食べ物はない上に、マラリアにはかかるし一家全員が枕をならべて高熱を出し、うなつているところ、乳飲み子が、熱でうなされて

いる母親の乳の出ない乳房をくわえて泣き出しているところ、死の寸前をさまよつて助けを訴える老人、水をほしがる病人、見るにたえられない悲惨な状態がありました。

三、盗つた品を首にかけられて

小浜島 黒 島 精 耕（九歳）

太平洋戦争、沖縄戦の悲劇は、決して戦場だけのものではなかった。戦争の悲惨さはなお戦後へと続く。

慘めな敗戦のあと、人々を待ちうけていたのは、衣・食・住なかでも食生活の困窮であった。日本全国いたるところで戦後の食糧難が続いた。ここ八重山でも、「ムイアッコン」を食べ、ソテツをもつて生命をつないだ。

このような戦後の食糧難の状況のなかで、今もつて子ども心にやきついて離れない出来事が私の郷里小浜島であった。このことを記すことはある意味で勇氣のいることであるがどうしても書かずにはおれない。事は沖縄戦が終り復員兵が次ぎ次ぎと帰つてきつあった。一九四六年（昭二年）の春のことである。食糧難にあえぐ島の苦しい生活の中で、生命をつなぐために、盗つてはならない他

人の物を盗んだことが島の人たちに知れわたると、その犯人たちが部落の中心地、（そこは島でオオミチと呼んでいる）に呼び集められ、当時復員したばかりの戦争で心は荒すさんでいる当時二〇代から三〇代の血氣盛んな若者たちから集団暴行を受けるという事件が起きたのであった。犯人のなかには島の人々が二人含まれ、あとは島外の人たちであったが、その状況はまさに悲惨そのものであつた。部落の中心地で、しかもそこには島の人たちがその状況を見るために沢山集まっているなかでの集団暴行である。イモを盗ったものはそのイモを首にはかされ、山羊を盗って食べたということで、その山羊の骨を一人ひとりの首にはかされ、さらにはひざまずきをさせられたなかで、なぐる、けるの暴行を加えられたのである。その行為があまりにもひどく、氣の毒だと知りつつも血氣盛んな軍隊帰りの若者たちのふるまいに、誰がそれに手を止めることが出来よう。気の毒だ、あまりにもひどすぎると知りつつどうすることも出来ずただその状況を見守るだけである。まさに戦場そのものである。戦争の醜さ、戦争の無慈悲さ、戦争の非人道さがそこにある。私は戦争とはこんなものか、こんなに恐ろしいものなのか、戦争が終つたとはいえ、そこに戦争の本質を見る思いであった。

盗みをはたらき、それがばれるだけでも、人間としてたいへんないいであるのに、まして大衆の面前でしかも集団で暴行を受けるといふことがどんなに心苦しいものであるか、それは当の本人ならずとも人間誰もが感ずるものであろう。

その人たちとて他人の物を盗みたくて盗んだのでもなく、飢餓の一歩手前で死に絶えることが出来ず、何とかして生命つなぎのため若者たちのふるまいに、誰がそれに手を止めることが出来よう。気の毒だ、あまりにもひどすぎると知りつつどうすることも出来ずただその状況を見守るだけである。まさに戦場そのものである。戦争の醜さ、戦争の無慈悲さ、戦争の非人道さがそこにある。私は戦争とはこんなものか、こんなに恐ろしいものなのか、戦争が終つたとはいえ、そこに戦争の本質を見る思いであった。

盗みをはたらき、それがばれるだけでも、人間としてたいへんな思いであるのに、まして大衆の面前でしかも集団で暴行を受けるといふことがどんなに心苦しいものであるか、それは当の本人ならずとも人間誰もが感ずるものであろう。

その人たちとて他人の物を盗みたくて盗んだのでもなく、飢餓の一歩手前で死に絶えることが出来ず、何とかして生命つなぎのため

にやむにやまれず、つい他人の物に手が出たはずである。戦争の悲劇は決して、戦場のみにあつたのではなく、戦争が終つて後も、このような形で人間を苦しめ、人間性を失なつて、ただ生きることのみにあくせくしていたのである。

人が人間をこらしめる。これが戦争ではないのか。私は人間が人間をこらしめあう社会のしくみがなくならない限り、戦争がこの世から失せることはないと思うし、したがつてこのような社会のしくみを改めない限り、私たちが求める眞の平和はいつまでたまでも私たちのものにはならないものだと信じている。盗みをはたらかなければ生きていくことの出来ないこの世の中のしくみをこそ問題にしなくてはならないと思うのである。

四、台湾疎開と食糧難

宇登野城 石垣 タマヨ（三一歳）

当時の私の家族は子供が五名で、上の子が三年生、末の子が一歳に満たない頃でした。夫は戦地で、不在でした。

私は別に疎開で台湾へ行ったのではなく、疎開の始まる以前に台湾へ渡りました。

そこで戦争がいいよ激しくなったので、住んでいた基隆の昭和町からトウホク郡のトナンへ疎開しました。基隆にいたときから防空演習があつて、それに出ていと罰だというので、私はマラリアにかかるふるえながらも強制的に参加させられました。五名の子供

のうち、末の子が病氣でめんどうをみるともなく、上の子は栄養失調で三歳なつてもまだ歩くことが出来ないという状態でした。

夜間の空襲などにあうと、隣りのタンクに親子六名ローソクの灯をたより一夜を過したこともあります。

台湾での生活は大変な食糧難で、ドジョウをすくつてきたり、子供たちの釣つてきたカエルまでも炊いてたべました。野菜などは勿論手に入らないのでシマホロギクを野菜がわりにしたり、とにかく雑草のうちでも食用になるのは何でもたべました。

終戦はトナンでした。男手のある家庭はみんな引き上げ、私たちも最後までとり残されてしましました。集団疎開した人々もほとんど引き上げていきました。金のある人々は何とか上手に帰っていましたが、私たちは幼な子をかかえて、途方にくれる毎日でした。

そこで親戚の四、五人と合流して、他人の軒下に寝泊りして二、三日を過ごしました。

そこからまた汽車に乗って行くのですが、当時客車にはとても乗れない状態ですので、やつと貨車に乗せてもらい、豚と一緒に貨車でスオウというところまで行きました。

その貨車にも当時のヤミで乗つたので法外な料金を支払わなければなりませんでした。また途中で機関車が止まるときさらに料金の上積を払わなければ貨車を引いてくれませんでした。

家主で、台湾の人ですがたいへん親切な方がいて、その人にお願いしたら荷物などもきちんと整理してくれて、一日がかりでトロツクというところまで牛車で行くことができました。

船はスオウから出るのでそこでしばらく滞在し、やつとの思いで八重山に帰つてきました。その船は六トン程の小型船でそれに百名程の引揚げ人が乗り込むのですから身体を横たえる事も出来ず、膝をだいて坐り込んだまま身動きひとつ出来ないという状態でした。そのうえ途中で船が故障してしまい一時与那国にたち寄つてから出なおすというようなこともありました。帰り着いたのは昭和二十年の十一月でした。ほつとして見ると年老いた人々はみんな白髪でやせおとろえ、見るも哀れな姿をしていました。

私の家族は八重山へ帰ると祖父（当時七十歳余）を加えて七名になりました。台湾から引きあげるときに三升の米をもつてきたのでそれに祖父のもつている米五合程をあわせて、それでやつと一時の急をしのぐことができました。

その三升五合程の米をたべつくした頃から私たち家族には食糧地獄がやってきました。

帰つてきたばかりで島の状態もよく知らないまま、あちこちと食糧を求めてさまよいあるかなればなりませんでした。

食糧難は台湾同様石垣でもたいへんなもので、畑に出てもイモのカズラ一本みることができませんでした。

私たちも幸なことに親戚にイモ畑をもつてゐる人がいたので、そのイモを親戚がみんなで順番に掘りおこしてたべることにしてもらいました。しかしそのイモも、親戚が多い上にイモの量はわずかでほんの一時しご程度のものでしかありませんでした。

四、五日に一回しかその順番は廻つてきませんでしたがその一回の量も手さげカゴの下半分あれば良いほうでした。それを次に番が

廻つてくるまでたべつながなければなりません。それで一日のたべられる量は、手のひらに数えてのせられるぐらいしかありませんでした。皮をむくのも、もつたないので水洗した親指程のイモをアオサの汁に小さく切つて浮べるようにしてたべました。

当時は調味料も勿論ありませんので海水を汲んできてそれで汁をたくといふぐあいでした。野菜とよべるのはありませんので野生のやわらかそらな雑草はかたばしから食用にしました。

頼りにしている親戚のイモもせいぜい一ヶ月程しかもちませんでした。食いつなげるうちに何とか次の手だてを考えなければなりませんので、荒れ放だいになっていた自分の畑を少しずつ耕してイモを植えることにしました。

毎朝四時に起きて長男に朝食の準備をするように言いつけると私と次男は肥桶をかついで畑に出かける毎日が続きました。私たちも自分の便所の水肥は自分で汲み出す分しかなく、どこへ行つても便所をかづき終るとそれから学校の便所（現登野城小学校）へ目をつけ、誰も起きてこない早朝に毎日水肥を汲みでかけました。

イモのかづらもたいへん貴重なものですので、植え付け後に雨が降らないからといって枯らすわけにはいきませんし、植付にしても雨をまつて植えようなどという余裕もありませんでした。

それで、女手ながら私が井戸を掘ろうと決心し、とりかかりました。

井戸といつても荒れ地に掘るわけですし、どのくらい掘れば水が

出るかもわかりません。年寄におしえてもらいながら水のでそうな地点に掘ることにしました。

クワとショベルとザル、これだけが唯一の道具でした。

掘り下げた深さが私の頭上を越えると、長男がザルにひもをつけ掘りおこした土砂を上に引きあげます。一日も休まずとうとう水を掘りあてたときは、うれしさに泣きました。

こうして植付けから四ヶ月程すると小指程のイモができました。

それこそ一家の命綱ですからできるだけ長期間食いつなげるようとに一株から一個ずつ順々にとつたたべました。当時はほとんどの人々がイモを掘るとは言わずイモを「ひく」というほどでした。根元をへらであさって大きなものから一個選んでとる、そして次の株の根元をあざるといふぐあいにだいじに数えながらとつていったものです。

配給もありましたが、ほんの少量で夕食に少しずつ混せてたべるという程のものしかありませんでした。

またソテツもずいぶんたべました。ソテツは幹を切りたおして皮を剥ぎ、その芯をカンナで削り木箱に入れて二、三日発酵させるとそれに箸の先ぐらいの小さな白い虫が湧きます。そのときが食べごろですので、それをイモに混せて練り、大きなウムニー（イモのダンゴ）にして食べました。今でも子供たちは当時を思い出して虫もいつしよにたべたウムニーの事を語り合うことがあります。

屋は畠仕事のあい間にソテツ採り、薪採りそして生活を維持しながら家屋の修理もしなければなりませんでした。八重山に帰った当

る品物との物々交換が主になつてきてしまいました。

私はだいじにもつてきた衣服を一枚、また十日程して一枚と食糧にかえながら子供たちの生命は何としても守らなければならないと頑張りましたが、衣服が相当数ある訳でもなし、とうとう着のみ着のままにされてしまいました。

いったいこれから私たちの生活はどうなるんだろうと空腹と不安で毎日が生きた心持もしました。

とにかくもうなる畠さえもありませんので、何がなくとも畠だけは確保せねばと人が寂静まったく午前〇時過ぎ、隣の人と共に声もたてないよう田のあぜを通り、二キロメートル程離れた「やみ」の塩販売人のところまで行つてとうとう着ている着物まで剥ぎとつて塩を手に入れて帰つてきました。

私たちが住んでいたところは山中でしたが、土地も赤土で草木を植えてもなかなか成長しないという程やせた土地でした。イモのかづらの植付もしてみましたが三ヶ月たつても地面を這うほどにも成長しないといったぐあいでした。

こうした生活で子供も私も栄養不良で次第にやせこける一方でした。

空襲の場合など、食糧のある人は壕の中へ避難しますが、私たちの家族は壕へ避難して生きながらえても出てきたら食糧のないまま飢え死するしかないのです。もう避難などしてもどうしようもないと子供たちにも言い聞かせていました。

また仮に避難するにしても、子供は栄養失調で歩く事さえ出来ない状態でした。

石垣市大川 慶田城 カメ（三二歳）

私が台湾へ疎開をしたのは昭和十九年でした。当時の家族は長男が八歳、次男が六歳、三番目が四歳、末の子が六ヶ月で五名でした。

疎開したところはシンチク省トウエンというところで八重山の人たちで九十名程いました。当時の疎開はだいたい一班で四十名程の班別にしてありました。

そこで私たちの生活は、まず食糧の確保に最も苦労しました。台湾へ着いてしばらくは配給もありました。子供が一日に七勺、大人が一合五勺程の米がありました。それでも半月程はわざかながら持参した金十五円もありましたので、それで不足分の食糧を求めて生活できました。しかしほんとうの苦しさはその後からでした。だんだんと当時は食糧を金では売らずに着物（衣服）や相手の要求す

そのときはかえつて「神デン仏デンオールカー、バガダー、ワイカイウヌタマバ、ウタシ、ヒヨーリ、ウヤファー五人マーズンイクカー、ウムイヌクサンクトゥニ、イカリーキ、ドーデン、神仏ヌオールカー」（神や仏がいるなら私たちの上にその爆弾を落してください、親子五人が共に死ぬなら何の思い残すことなく死んでください」と手をあわす程の気持でした。

ただ食糧難をどうのりきるかそれだけしか念頭にありませんでした。こういう生活をしているうちに、私たちの隣の村のジュリンコウというところに兵隊がいて、私たちの生活をみたのか私たちを四五人集めて、「あなたたちはどこから疎開してきたのか」、「ここでの生活はどうか」などと色々質問していましたが、私がありのままの生活状態を話すとその兵隊は「私の部隊で働きなさい、子供たちでも、何名でもよいから」と言ってくれました。

私はまっ先に「お願ひします、生命一つだけは助けて下さい」とお願いしました。翌日その部隊の廻してくれた車で私の家族とその外に四所帯の希望する人たちはジュリンコウに行きました。終戦の二か月前のことでした。

そこでは砂糖の配給もあって、月給ももらうことができました。給料は私たち大人が三〇円、子供が三円という額でした。仕事の内容は、軍が台湾の人から供出させた家畜（ヤギやウサギ等）の飼育でした。それから毎日末の子をおぶつて草茹りをすることが日課になりました。

に殺人や物盗りの話題がたえない程でした。

八重山へ帰るための船もヤミ船で大人、子供の区別なく一人三百円の船賃でした。私たち五名で千五百円をも支払わなければなりませんでした。乗客の定員を二、三倍をこえる客を乗せるので寝るすき間もない程いっぱいでした。故郷を目の前にした观音崎の沖で船が故障し、一時はどうなるかと心配しました。

こうして八重山に帰ってきたのは十月の十日過ぎだったとおもいます。船から降り立った八重山は、人の姿もみえず、栄養不良らしく頭の毛が抜けおち、やせて腹だけが異状にふくくれあがつた子供たちがあちこちにたむろしていました。とうとう機橋から家につくまで大人にあうことはありませんでした。

家に帰つてみると屋根はないし、戸も壁もない庭には雑草が背たけ程伸び、足の踏み場もない。全く連絡も絶えていたのでもしゃと思って隣に聞いてみると家に残っていた父や母は死んでしまったということでした。ただ位牌だけが人一人いないあばら家に放置されてありました。

私はもう茫然として立ちつくしたまま何をしてよいか見当もつきませんでした。

それでも生きて帰ることができたのだ、今からは子供たちと一緒に何とか生きぬかなければ決意しました。台湾から持参した米三升が残された今後の食糧のすべてでした。

その後は親戚の人の情にすがりながらも何とか生活はじめました。野の草、ハノール（雨が降った後に雑草等の根元にはえるノリ）、ソテツ、パパヤの根元と、食えるものは何でもたべました。

終戦一か月前から軍は私たちに飼育させた家畜を毎日殺して食べるようになりました。本土の兵隊たちで家畜の手足、頭等はたへなかつたので、私たちはそれを貰つてたべることができました。ヤギの頭などは子供たちと大喜びでたべたものです。

このようにして二か月程は何とか食糧にありつけたと思うとまもなく終戦になりました。終戦のしらせを聞いたときは、又どんな生活になるのか、どうしたら生きて八重山へ帰ることができるだらうか、とそれだけが心配になつてきました。

兵隊が「早く帰らないとたいへんになるからできるだけ早く目に帰りなさい」と言ってくれましたが、当時汽車に乗るのもたいへんな事で、そもそも目的地の基隆までどのくらいの距離があるのか、何日かかるのかもまったくわからない状態でした。それに上の子が九歳で末の子はまだ歩くことすらできないのです。子供五名つれて基隆までゆくのは至難な事でした。相談する相手もほかにいませんので親切にしてくれた兵隊に相談すると、倉庫の品物をわけてあげるから、それを売つて旅費にして帰れと言つてくれたので、リヤカーを引いてその品物を貰いにいきました。品物は、軍服の夏冬あわせて五着とカヤ、毛布などでした。そのうえその兵隊がトラックで基隆まで乗せて行つてくれました。

基隆で、その品物を売りはらつて旅費をつくりました。船があるまで基隆で滞在しなければなりません。それでも自分で作物をつくるなければ誰もたすけてくれはしません。とうとう帰つて一ヶ月目に烟を返してもらつて自分で耕作することにしました。

それからはもう明け方から夜中まで働きばくめの生活でした。配給もありましたが、生命を維持するためにはたいした量にはなりませんでした。

現金を得るためにオモト岳の白水まで行って薪をとつて金にかえました。良質の薪でなければ売れないのにそうとう山深く入り込みなければなりませんでした。

また日傭に出ても一日働いてイモが翌年の三月ごろにはたべられるようになります。自分で植え付けたイモが翌年の三月ごろにはたべられるようになります。

自分で植え付けたイモが翌年の三月ごろにはたべられるようになります。自分で植え付けたイモが翌年の三月ごろにはたべられるようになります。

五、石垣島事件の戦犯として

鶴間 小 浜 正 昌（十七歳）

日本軍がミドウェイ、ガダルカナル、ソロモン海戦で敗退を余儀なくされた一九四三年（昭和十八年）、私は八重山農学校へ入学しました。入学一年次は戦況の実態を知るすべもなくもちろん知らうとも

せず日本は必ず勝つのみを信じておった。

昭和十九年頃から昭和二十年に至って空襲は連日連夜はげしくなり、住民も軍の命令によって避難の生活が始まった。戦況は、八重山にも敵が今にも上陸するかの情勢であった。毎日の如く学徒作業で勉強することのできない状態であったので、海軍飛行兵に志願することを決意し、その手続きをとり試験を受けて合格した。学校当局には退学の手続もとらず、西表島上原に避難している家族のもとに帰った。三月中旬頃、三重県航空隊入隊の通知を受けた。私が避難地の上原から旅立った日は、風雨波高く、くり船での旅立なので、見送り人も家族と周囲の若手の人々で淋しい旅立ちであった。

戦いは敗色濃くなっていたでしょう。沖縄近海はすでに敵の制覇権にあり戦局は一段と激しくなり入隊基地である三重県に行くことはできなかつたので、佐世保所屬一般小兵に編成、現地入隊となつた。部隊は石垣島海軍警備隊第一小隊で田口少尉の配下に配属された。昭和二十年四月上旬入隊して二週間目に私は三人のアメリカ捕虜を虐殺する事件に加担させられ戦争犯罪人として東京東鴨の拘置所で初審絞首刑、一年二か月目に減刑、重労働五か年の刑を科せられた。

今、その事件を想起するだけでも身の毛が立ち語りたくないが

戦争のもの残酷性、非人道性を考えると、一度とこのようなこと

か。何処から来空したか。アメリカは勝つと思っているか。空艦の数とかいろいろと質問されたようである。その答の中にアメリカは必ず勝つとはつきり言つたと後日、話を聞いたのである。

処刑の理由は

一、捕虜を台湾へ沖縄に送るための船便又は飛行機がなかつた。それは石垣では国際法による捕虜を裁く機関がないためである。

二、捕虜を監視するための監視兵の不足、それに食糧不足、長期にわたる捕虜収容施設がないと言ふことだつたらしい。

私たちは、捕虜が処刑される前日の事だったが台湾からの輸送船が（軍の必需品を積んだ）石垣に入港した。その荷揚げ作業のため、朝食ぬきの朝七時頃荷揚げ仕事中、敵の空襲にあり、無防備のダイハツ船で命からがら陸地へ避難することができたが、残念な事に、戦友三名が目の前で銃撃を受けて死亡した。三名の戦友を介抱する寸暇がない程のはさみ撃ちの襲撃であった。

その事件があつて隊員は、捕虜に対する殺意をむきだしにし、なお、かかる戦局の中で興奮している最中なので捕虜の処刑には積極的に参加せずにはおれない状態にあつたことは確かである。

処刑当日は、先任下士官の指揮で処刑現場を行つた。処刑現場は警備隊本部から南東約六百メートル位離れた位置であつた。現在はパイン畑となっている。処刑現場は殺害後、埋葬すべく深さ一・五メートル、縦一・五メートル、横二・五メートル位の穴が準備されあつた。処刑は、午後十時頃から始まつた。最初はデボン尉とタグル兵曹の処刑が行われた。二人とも処刑場へ連れてくる途中相当暴行を受けた様子で穴の側まで歩ききれず、引ずられて、穴の前

があつてはならないと思い事件の概要を話すことにした。ただし、私はその当時最下級兵であったので、執行までの具体的な内容等については、知るすべもなかつたが公判中からの内容、聴聞、見た事などをまとめて述べることにする。

昭和二十年四月第二次大戦末期、日本海軍が守備する石垣島に米軍機一機が撃墜され、その搭乗の将兵三人はパラシュートで降下して、日本軍の捕虜となつた。「日本軍幹部は直ちにその内二名は斬殺し、一人は兵士の士気昂揚のためと称して立木にしばり付け、四十人余りの兵士に命じこれを剝殺させた。私達関係者は逮捕され、横浜軍事裁判所に於て、四か月余りの審理の結果、四六名の内、四十一名は絞首刑の判決を言渡された。」

搭乗員の名前は、V・L・テボン尉（二十八歳）、R・タグル兵曹（二十歳）、W・H・ロイド兵曹（二十四歳）であった。彼らは、石垣島飛行場爆撃のため、ウルシー海域で行動していた航空母艦から飛び立つて来たということだった。

敵機撃墜、飛行士降下の情報によつて、井上司令官は、部下の大浜地区隊長佐藤少尉、海軍特務少尉前島勇市に三名を逮捕せしめ、バンナ岳麓にある警備隊本部へ連れて來いとの命令のようであつた。三名の捕虜が逮捕されて本部へ連れて來たのは午後二時頃であった。捕虜は両手を後に縛り両足も縛りつけ、防空壕にほうりなげたままの監視だつた。三日位続いたと思う。三日の間、敵の情報をキャッチするため厳しく追及の質問が繰返され、その質問者は副官の井上勝太郎大尉であった。捕虜は疲れていたと見えて、多くしゃべらなかつた。質問の内容は、大統領が死んだことを知つてゐる

に、ひきがざまされた。手は縛られ目からくしされていた。

最初の一人がデボン尉が斬首し、スケル兵曹は、田口少尉が斬首した。

そして準備されている穴の中に落され二人の処刑は終つた。二番目のトラックからロイド兵曹が乗せられて來た。十時三十分頃だつた。ロイド兵曹は穴の側で準備されてあつた棒に目かくしのまま縛りつけられた。榎本中尉の指揮による刺殺である。榎本中尉は「教えられたとおり一人ずつ突け、下士官は誰か出て模範を示せ。」と命じた。藤本中兵曹が進み出て突いた。つづいて成迫兵曹、途中で榎本中尉の模範突きが示され、各小隊は順番通りつぎつぎと刺突をした。

処刑には約五十人が参加し、刺突は、三十分程づいで十一時過ぎ三人の処刑は終つた。そして昭和二十年八月十五日終戦、日本は敗けた。処刑に関する一切の書類を焼却した。三人の遺体も九月に発掘し榎本少尉の指揮で火葬され空籠に納骨して、西表島近海の海底に沈めたようです。それは誰も消滅の策であつたでしよう。

私は米軍の武装解除と共に、ほとんどの武器を石垣島の西近海の海底に沈める仕事に従事していた。十月末頃現地除隊して、故里鳩間島に帰り、農業に従事していた。

かように約六ヶ月間の懲役の軍隊生活も終つたかのようであつた

が昭和二十二年八月、その夜はきれいな月夜であった。鳩間島の白浜での月夜は格別である。四面海にかこまれた周囲四キロの小島は昼の様であつた。

私は戦犯として逮捕される夜は、旧学校の運動場の大樹の枝が護

岸まで雄々と伸びきっているその下で、友人といろいろな想い出話をしゃ、私達青年の今後の課題等を語り合ながら、月夜のひと時を楽しく遊んでいた。

すると、石垣島の方向から八時頃五トン位のポンポン船が岬に着いた。今頃なにしに、どこから来たのかと他人事のように話し合っていた。ところが自分に関する事であったのである。母が血相を変えて呼びに来たのである。特に田舎では警察と聞くだけでもとび上がるぐらいい恐れていたものである。それは、田舎には犯罪という事がなかったからである。母の話によると区長さんの案内で石垣警察から刑事が来ているので呼びに来たとの事であった。母は震えながら、なにか悪い事をした覚えはないかとしつこく聞くのでなにもないと答えた。しかし、警察に呼ばれるような悪事をした覚えはないので、とにかく金うことにしてようと刑事と自分の家で会った。

刑事が言うには、貴方を連れて行く内容は知らないが署長の命令

で連れて来たので、すぐ石垣に行つてもらうとの事。用件が済めば

明日はすぐ帰られるから着のみ着のままで、よいとの事でしたので半袖の開襟シャツに白ズボン、下駄ばかり連れて出された。

石垣島に着くとそのまま留置所入りで皆目見当がつかない。「用件が済んだら明日は帰る」と言つて連れて来て留置所に入れるとは何事かととなりつけたら、監視員も理由は解らないと言つておったが、実際は、わかつてたようである。それは取調べる時に石垣島事件を尋ねたからである。最初は見当がつかないので隣室を覗くと同小隊に勤務していた自保出身の前内原君が留置されているので色は堪えられなかつた。

その服装の検査は秘密もれや、外部からの危険物持込みを防ぐための処置であつたようだ。

石垣島事件は、被告四六名の内一審で四十一名が絞首刑の判決を言渡された。私も死刑の宣告を受けた。一時は自分の耳を疑い間違いではないかとも思つたが判決を言渡されると同時に側面に立つている監視兵によつて手錠をはめられて間違なく絞首刑であると感じた。四名の石垣事件担当の弁護士の必死の努力にもかかわらず予想よりもはるかに重く四名の多数の絞首刑を出した事を非常に残念がれていたようで本当に弁護士には頭が下がる思いが一杯であった。人間が作った法で人間が人間を裁くという矛盾を感じるのである。ましてや戦勝国民が敗戦国民を裁くのですから公正な裁判とは言つてもそこには感情が入つてくることは避けられないことだったのである。

私は死刑囚として一年二か月を経過した昭和二十四年五月頃死刑より重労働五年に減刑された。私と一緒に減刑された者は四十一名の内二十八名であった。統いて第二回目の恩典によつて六名の被告

々聞いて見ると彼も全然わからず突然留置所に入れられたとの事だったので、その時ははじめて捕虜殺害の石垣島事件に関連していることが判明してきたのである。刑事の取調べで確認したのである。「明日は帰えられるから」と言う刑事の連行手段にも怒りをおぼえたが敗戦国の刑事にも苦しい事情もあったのである。八重山留置所で一夜明し、米軍から取調べ官（裁判での検事）が見えて、井上部隊の司令官や私の小隊長、隊員の写真を見せて、それらを知つているか等を確認しただけで、知つていると答えたなら軍船で那覇行きとなつた。船内では小銃をもつた監視付きの軟禁であった。那覇に着くとM Pの護衛で軍の施設内の一人住みの小屋にぶちこまれた。

那覇での本格的取調べが始まつた。ピストル又はカービン銃をもつた兵隊が監視しての取調べであった。私は取調べについて事実は全部認めた。それはうそもかくしも出来ない程完璧な資料をつきつけられたからである。

取調べ、貴方は一水兵で上官の命令でやつたから証人として東京へ連れて行くから心配することはないとの通訳であったが、捕虜を突いた事を認めた者が証人として済まされるか片心は心配であつた。三日間の取調べは終つた。飛行機で東京行である。午後七時頃東京羽田飛行場に着いた。着のみ着のまま、下駄ばかりの東京到着である。寒さを知らない南方育ちの私には、東京に着いた時は肌が突き切られるような寒さを感じた。軍の車で、もののいい護衛付で東京豊島区にある鶴鳴物置所の独房に監禁された時に、覚悟はしていたものの証人ではなく米軍捕虜三名殺害による戦犯として逮捕されていることに気がついたのである。

が死刑を免れた。最後に絞首刑として残つたのは七名であった。その七名は四月八日未明（午前零時）鶴鳴の絞首台において刑が執行されたのである。合掌心から冥福をお祈りします。

前述したように第一審判決は絞首刑での独房生活を一年余りさせられた。その間太陽の光りを浴びたことはなかった。人間は太陽の光りを浴びないと膚が黄色に変色することを始めて知つた。死刑囚での生活は、毎朝五時起床六時～六時二十分までM Pの手と手錠をかけての運動（監告と監査の間を十五分から二十分ほど歩く運動）その時間以外は外部とは断絶であった。やりきれない気持であつた。いつ刑が執行されるかわからない。死刑囚に対しての取扱いは慎重であった。朝鮮戦争が勃発してからは死刑囚の取扱いもいくぶん緩和され軟らかくなつて來た。食事は朝食は洋食、昼食と夕食は和食の二流であった。洋食の場合最初のほどははじめなかつたが空腹のためべざるを得なかつた。洋食といつても粗末なものでパン一個（ちぎるとボロボロと落ちる粗品）でそれにバターかチーズとコーヒー一杯であった。昼、夕食は湯呑茶碗の一杯の米飯と汁。タクアン二切で、食べ盛りの青年でカロリーより腹一杯の食物が欲しかつた。

死刑囚の一日の日課は朝五時起床、六時～二十分まで監視つきの散歩、七時朝食、八時昇興、十二時屋食、五時夕食、十時寝床といふ单调な日々を一年余り過したわけである。

週一回坊さんが仏教の指導にこられた。読書は許されていたが殆んど宗教の本であった。監視員は三分毎にぐるぐる廻ってきた。自殺を防ぐためであったようである。自殺者が出ると監視は厳しくな

る。実際自殺者が出了。その自殺者は、毎日約三尺五寸位のチリ紙を配るのであるがそのチリ紙でコヨリをつくりそれを縄にして首を絞めて自殺したことであった。死刑囚は常に毎週木曜日がなにより恐れられていた。その理由は、死刑執行される者はM.P.が名簿をもつて来て各室の前に書いてある名前と照合していくのである。それによって今週はだれだれが執行されるんだと言うことがわかる訳である。又、金曜日は入浴があるので、入浴日が無事に済めば、今週は死刑執行はまぬがれたと安心したのであった。一週間一週間が死刑囚の闇いであったのである。死刑執行は土曜日の未明ラッパの合図で執行された。私は死刑から五年の刑に減刑される前に、M.P.が名前照合をしていたのでさては死刑執行かと思つていたら、呼び出しがあって、減刑になつたから室で準備して待つていろと言わればほっとした。

減刑されて出て行く者と残されている者の心境はどういう言葉で表現したらよいだらうか。よろこびの反面悲しい気持であった。私は死刑から重労働五年に減刑され、A級戦犯の方々と一緒に棟で同階室であった。仕事は階室の仕事の配分係りであった。特にA級戦犯の方々は仕事は割当しないでもよいことになつておつたが本人達から申し出によつて軽い仕事をさせてやつたが、そこで感じたことはこの人達が戦争を指導した人達であつたかと疑問をもちたいほどよい方々ばかりであった。起した罪は憎んでもその人は憎まずである。戦争を起して国民を地獄のどん底におとし入れた責任は免れないが新日本の民主社会を築いていく上に戦争は負けてよかつたと思つてゐる。減刑後出所までの約五年いろいろの事件や問題もあ

一家族十六名全滅し、私一人生き残つて—

波照間 大 油 ミ ツ (二十四歳)

十九歳で結婚した私は二十一歳で男児二人をかかえた未亡人になりました、主人（先夫）の実家で大勢の家族の中で生活したのです。

主人は現役兵で瀬戸内事変に参加して、五六年で満期して帰りましたものの、戦争の疲労のためか、結核をわずらい、結婚後一年半で他界してしまいました。

私達一家は石垣で生活をしていましたが、主人の死亡後は波照間に帰り、主人の実家でくらすようになりました。

主人の実家は主人の母をはじめ、長男夫婦にその子供、三男夫婦、四男の嫁（私）と子供と云ふうちに、嫁兄弟が三組も揃つて一家で十七名家族が生活をするということは、今の世代では考えられませんが、封建の世の中ではよくも家長によつて家族の統制がとれたものであつたと今思い出すと懐しくなります。

当時は鶴農家の一つに数えられておりましたので、生活は何自由なく、親や義兄、嫁姉達も農業に従事し、なれない私をいたわり家で子供の世話を炊事を割当てたのです。

二十一歳の若さで未亡人になつた私を励ましてくださる親、兄弟に感謝しながら、子供の成長を楽しみにして、再婚と云う事を考えず、女は一生一夫一婦で人生をつらぬくのが本当の女である、と考え、当時流行の「軍國の母」と云う歌「歓呼の歌や旗の波…東洋平和の為ならば何で泣きましよう」のため、散つたあなたのかたみ

ったが省略します。

思えば、志願兵として入隊し、東西もわからないままた皇國日本勝利を信じつつ上官の命令するまま動かされて来た青春、そして戦犯として五年余り刑務所生活を余儀なくさせられた青春、そし時の今日よく考えてみると同じ人間でも戦況下の人間は精神状態が異なるのです。それは戦前の教育に問題があつたのです。戦争は各国の事情で起しているのではない。精神状態の狂つた人間をつくりだすことによって起しているのです。そういうことを私は学ばされました。人間の生命、人格が尊ばれる社会こそ戦争を否定する社会だと思います。それは眞実を教える教育がなされはじめて可能だと思います。そしてわたしたちは毎日毎日の生活の中で正しい教育、正しい社会をつくるためがんばらなければならないと思いま

す。

最後に私たち沖縄出身の七名の死刑囚に対し当時沖縄連盟会長仲原善忠氏、青年同盟書記神村朝堅氏、浦崎純氏、吉野高善氏、その他の方々を中心に郷士兵、戦争犯罪減刑署名の運動を展開されその歎願書によつて減刑の恩典に浴し、現在一社会人として働かせてもらつてることを心から感謝申し上げまして筆を止めます。

の坊や、きっと立派に育てます。」

若い私はこの歌を自分の身にたとえて、主人は戦死こそはしないけれど戦争のために病死した（お国の為に立派に死んだ）ものと、信じていたからでした。そしてこの歌を歌うのが心のなぐさめでした。

今でも、当時を思い出して、歌つて涙ぐむこともあります。
その頃から、第二次世界大戦もはげしくなつたので、男の方は殆んど石垣島へ防衛徵集されて行きましたので、私が郵便集配員として働くようになったのです。

当時は毎便、郵便物と一緒に石垣島と波照間を五時間余りもかかって、往来して集配員の任務を果さなければならぬい時でした。当地ではすでに二、三度も空襲を受けたので、敵機の襲来をおそれて、夕方の五時あとから運搬船は石垣島向け夜間運航を始めたのです。

約二時間半かかるて新城島の近くに行く頃は日も暮れてやみ夜になつていました。

新城島の近くは浅瀬があるので、一夜を船の中で明し、翌朝、未明に船を走らして石垣に着くのは朝の八時頃でした。夜間航海なので空襲のおそれはないけれど、途中で敵の潜水艦にやられはしないかと、不安で胸いっぱいでした。

何しる自分一人の身なれば、さほどまで心配はないが、幼い二人の子供を家族に預けての事なので、心配はたえなかつたのです。

その当時の船員の苦勞が思いやられます。

昭和二十年三月の末、軍の命令で波照間住民は一人残らず西表島

南風見に避難せよとの事でしたが、もともと西表島はマラリア地帯であると云う事を知っていましたので、西表島へ行ってマラリアで死ぬよりは、いつそその事死んで島を離れないと言ふ方もおりました。しかし、疎開地への引率者、山下さん（軍から派遣された）と云う方の指示はきびしく誰一人として、反抗する人もおらずその方の指示によつて、働く男と、子供に手のかからぬ女は、みんな南風見へ避難小屋を作りに行かされ、残る人は隣組総動員で疎開の準備をしました。

私の班は九戸で六十人余りの人数になりました。食糧品（穀物）はひとまとめにしてわらで作ったわらにつめて荷造りをし、豚は

つぶして塙づけにして避難所でのおかずの用意にしたのですが、多くの家畜はこのよう自ら殺したのです。なぜそのようなことをしたか、と言うと、南風見へ疎開した後は家畜の世話は出来ないし、餓死させるよりは自分達で処理したほうがましだと考えたからです。

当地では、昔から飢饉に備えて、ふだんは粗食をしながらも、四五年になる米や粟も穂のまま穀に保存する習慣がありましたのでどの家庭にも、多少の食糧品は用意されていました。わずか一週間位で準備はととのいました。

当時、波照間ではカツオ漁を主として経済をまかなつておりましたので、七隻ぐらいのカツオ船がおりましたが、軍に徵用され、又二隻は空襲でやられましたので、三隻（進幸丸、豊福丸、大福丸）で疎開人を運びました。

昭和二十年三月三日（旧暦）、第一回目の疎開人を乗せた大福丸

は、夜中の二時頃、老人、婦人、子供を乗せて風一つない静かな波の上をすべるようにして走りました。

島が遠ざかるにつれ、生きて再び自分の島にもどれるか、もどれないかと思うと、悲しみと不安で涙がこみあげてくるのでした。

船の中では、すり泣きの声も聞こえてきたので、みんなで、日本は決して負けない、きっと勝つのだと励まし合いました。

静かな晩でしたので、誰一人、船よいする人はいないと思っていましたが、「ウーン、ウーン」と苦しそうな声が聞えてきたので、誰が船よいしているのかと、たずねてみると、そばにいたじいさんが、自分の家の嫁が産気づいていると言わされました。

彼女は初産でした。私は若しや船の中で赤ちゃんが産まれたらどうしようかと、ひやひやでした。間もなく船は夜のとぼりがある頃には大原の東海岸の近くまで来たかと、思うと急に機械が止つてしましました。四、五名の船員は竹ざおで船をこいだり、機械をなおしたりしている中に太陽は東の水平線を離れて来たのです。

そうこうしている中に、機械も動き出し、大原の東海岸を廻つて、南風見の浜で食糧品をおろしました。

大原に着くと避難所から迎えの方が来たので私達はその方に付いて避難所に向いました。

何しろ老人、婦人、子供ですから足もおそいし、また、大原から南風見までは約二里の道のりですので、避難所に着いたのは昼頃であつたと記憶しています。産気づいていた彼女もどんなに苦痛であったのか、避難所にたどり着き、そこですぐ男の赤ちゃんを産みました。

したが、その児もマラリアで死んでしまいました。

避難所には班員の入れる程の簡単なかやぶき屋根と、炊事場がつくれられてありました。当時、二十四歳の私は炊事班長として六十人余を食べさせるのにずい分なやみました。

主食は米、粟、いも等でおかゆをたき、それにはつたい粉を入れてかためて食べさせたのです。

島から持ってきた野菜類がなくなると、南風見の東海岸まで行って、ニガナを取ってきてみそ汁に入れ、栄養の補給をしたのです。敵機に見つかるぬようになると、昼間は子供達も浜で遊ぶことを許さず、夕方になるのを待って、子供達は浜辺で遊びました。

私の班、四班は六十人余の中、老人と子供を合わせると、三十人余りおりました。六十人余の人々が一世帯になって共同生活をしたのですが、みんなが協力しあって、自分の子他人の子の区別なく、面倒を見てくれました。

船は毎日、日が暮れてから南風見より波照間に着き波照間から、夜中二時に出港し、朝の未明に南風見に着くのでした。このように敵機に見つかるぬよう人にや食糧品を運んだのです。荷おろしした船は岩の近くに止め、黒網で船全体にかぶせ、その上に木の枝をのせて昼間は浜におりないように、注意していたのです。このようにして、一応人を運びおわると、みんなで力を合わせて敵機のこない合間を見計って、かやや丸太を切つてきて倉庫をつくりました。

そういうしている中に収穫期に入り、米、粟の収穫に男の方と子供の世話をいらない女は島へ出かけ、収穫して送ってくれました。

病人が一人出たかと思うと、次々に枕を並べて高熱を出してしまって、私達元気な人は炊事病の世話をやらで大変なものでした。

南風見にいる私達は送つてきた作物を頭割にして、各班に分けたのです。

このような状態が何時まで続くかわからないので草を切り払つていもを植えたり、そてつのみきを切り干しにしたりして、食糧品の用意をしたのです。

梅雨期に入ると、雨も多くなり湿地帯なので衛生上とても悪く、特に便所は砂地を掘つてその上に丸太をのせてつくつたので、雨が降ると、うじ虫は丸太の上まではい上るので便所を何か所も移しました。

避難して、一ヶ月はみんな元氣でしたが、五月に入ると、病人が始めました。マラリアと言う病気はこんなものであるのか、寒気がしたかと思うとふとんを二枚かぶせておさえても、はねかえす程ふるえるのでした。しばらく時間がたつと、ほつさはおさまり汗びつしよりで、熱はまた、平熱に戻るのでした。しかし、これが何回もくり返されると体力は弱まり、看病のかいもなく死んでしまうのでした。

当時、山盛と言う医者がおられましたが、何しろ熱が手に入らない時でしたので、思つよう医者の治療も出来ず、よもぎの葉をすりばちですつて、その汁を飲ませたり、バショウのみきを切つたとき、汁は解熱によくきくと言つて飲まし、たいたみきは熱をまさせるため、枕にして、頭からは水をかけるやら、元気な人は代わる代わる看病しました。

病人が一人出たかと思うと、次々に枕を並べて高熱を出してしまって、私達元気な人は炊事病の世話をやらで大変なものでした。

私の家では長男の嫁姉が、兄の防衛徵集中に十六歳を頭に六人の子供を残して一言の遺言もなく死んでしまいました。（当時三七歳妊娠六か月）また、隣では六年生を頭に五人の子供と病弱な夫、年よりの祖母を残して他界したのです。その家は空襲でやられたけれど、その御主人は家は焼けても妻さえ元気であれば、子供は何とか育てられるのに、病弱な自分はこれから先、どうすればよいのか、と男泣きに泣いておられました。

六月に入ると敵機の数は多く見えるようになつたが、友軍機は全くと言ふほど、姿を見せなくなりました。戦争はいつまで続くものか、病人、死人はふえる一方だし、毎日不安でした。葬式もアダン葬むしろにくるまい、穴を掘つて埋めるという悲惨なものでした。

私は郵便集配人としての任務がありましたので干潮を利用して、南風見より仲間川を渡つて、古見に行き、古見の配達の方に郵便物をことづけて、石垣へ郵送したり、又郵便物を取つたりして、任務を果していました。避難所にいる間に、二～三回仲間川を渡りましたが、或日は、敵機が私の頭上を低空して飛んでいたので、生命は今日限りと、あきらめていますが、幸い弾も落さず、無事に帰る事が出来たのです。又避難所に居る間も敵機は何回となく南風見の南海上を飛んで行くけれど、避難所には幸い空襲はなかったのですが、病気との戦いの苦しみは戦場の人達と変わりはなかったと思います。

ある日、疎開者の責任者山下さんは波照間から帰つてくるなり、各班長と、炊事班長に集合しろと命令したので、四～五人の班長と

私（女は一人）は集まりました。身体の大きな山下さんは太い長いむちで、力いっぱい一人一人をたたきました。弱い私は、たたかれると同時に地べたにたおれたのです。何の理由でたたいたのか、その時は今でもわかりません。

七月頃になるまでは、各班にもたくさん死人がでました。班員の大半は病氣でしたので、熱がさめると炊事の用意をしたり、バショウを切つてきて、熱発した時の解熱させる準備などしたのです。

たしか七月の中旬頃と記憶しておりますが、疎開解除の知らせを受けた時はほっとしたものでした。私は炊事班長の責任もあつたので、最後の船で帰りました。私の妻は炊事班長の妻でしたので、悲しくなりませんでした。

私は炊事班長の妻もあつたので、最後の船で帰りました。私の子二人と、娘の子二人をつれて帰つたのです。夜中の二時頃波照間の桟橋に着きましたものの、元氣でない子供達をやみ夜に歩かすと言ふ事は大変なものでした。

三、四か月も人の通らない道は草がおいしげり、子供は草むらの中に、かくれるほどでした。何度も何度も休んでは歩き、うす暗いあたりのもれでいる我が家を見つけて、やつとの思いで家にたどり着き、急ぎ足で「おかあさん」と家に入ると、母は熱発して寝ていましたが、私がそばへ行って「今、帰ってきたよ」と、言うと、力のない小さな声で、「みっちゃん、母はもうだめだ、娘さんの子供も自分の子と思って育ってくれ。あなたは夫はいないが、男の子二人いるから、この家

にとどまつて子供を育ててくれ。」と、おっしゃってあつい手で私の手をにぎつて、涙をおとされましたが、よく日、母は高熱を出して亡くなりました。

母が亡くなつた頃までは、私も三男の嫁姉もまだ元気でしたので人を頼んで棺もつくらし、棺に入れて葬式もできました。

家族が多いだけに、その後食糧に困り、栄養失調と、寒もなく看病もできないために次々と病気は悪化して死んで行くのでした。私の次男は、當時四歳で、家族の中で四番目に死んでしまいました。

父のいない子供だけに、私の子供への望みも多く、きっと立派に育てる、期待していた私は、ほんとうに大きなショックでした。

その後、身体の疲労からとうとう私も熱発してしまいました。

一日に二人も死んだ時などは、元気でない自分にむちうつて、杖をつき草のおいしげつた道をつづまいたりして、元気な方をお願いし、葬式させたのです。アダン葬むしろにくるまい、墓も空かないで燐鉱会社があつた当時掘り出した石ころを利用して埋めるというふうに、まるで動物を埋めるようなむごいやり方でした。もうこうなつて来る、死を悲しむよりはどんなにして葬式をするかとの心配が強かつたのです。

ある家ではじいさん一人でしたので、なくなつてくされるまで知らないという状態でした。

こんなに苦しみながらも、日本が負けたと言うことは信じられませんでした。間もなくして二人の兄達も防衛徵集より帰りました。長男兄は妻子をなくして、どんなに悲しく、くやしかったかがさつ

しられます。

三男の嫁姉は、子供がいないだけに夫婦仲もよかつたけれど、夫を待つっていたかのよう、兄が帰つて三日目に他界しました。

二人の兄が帰つてきたので心強くなりました。兄達は、私達家族にもみをついておかゆをたいて食べさせたり、魚を取つてきて食べさせたりしたのですが、無理をしたため熱発してしまいました。その頃までは、十七人の家族の中、半数以上、マラリアのため死んでしまつたのです。

私の実家の兄も、防衛徵集から帰つてきてパパヤのスープをびんに入れて、私を見舞にきてくられました。そして、家に帰つてきなさい。自分が看病するからと言つて帰つてきました。その時までは熱発しながらも、熱が下がると炊事の手伝いぐらいはできるのと、家族の事が気がかりで実家に行けなかつたのです。でも、子供の死後は淋しくて、親兄弟の顔が見たくてたまりません。兄達の許しを得て、何度も休みながらやつと実家にたどり着きました。「お母さん」と言つて入つた私は話す言葉もなく、その場に泣きくずれました。

父も熱発して寝ていましたが、私を見るなり「なにに帰つてき

たか、女は嫁いだらこの家人ではない。何を食べるためきたのか、明日、すぐ帰りなさい。この家にはお前に食べさせる物はない

い。」と、親子でありながら、私をひどくしかりました。私は悲しくなりませんでした。

兄と嫁姉を見て帰るうかと思って、裏座敷に行きますと、兄は高熱で脳症をおこして意識不明でした。姉は髪を切つて全く男みたいな丸坊主でした。「姉さんなぜ髪を切ったの。」とたずねると、「しらみがいっぱいだし、取ってくれる人もないので、分家のおばさんに切ってもらつた。」と言つていました。

兄も姉も重体でしたので、今までここで面倒をみせられないと思ひ帰ろうかと、思つてゐる間に日が暮れて、とうとう帰れなくなりました。

そのよく日から、ひどい發作を起して兄の死もわからない状態になつてしましました。

幸い実家には、母をはじめ、妹、甥、姪達もまだ元氣でしたので、看病してもらつたのです。意識を失つた私は、死んだ子供の名を呼んだり、家族の名を呼んだりしたそうです。

私が実家に帰つたのは九月初め頃で、意識ついたのは、たしか十月頃であったと思ひます。

私が実家に帰つてゐる間に、姉家の家族はみんな亡くなつてしましました。葬式も隣組や親戚の方々がしてくれましたそうです。私はいつまでもその方々の親切な好意を忘れるることは出来ません。

ようやく元気になつた私は、姉家に帰つて仏壇の前で、自分一人生き残つてほんとうに申しわけない、と心ゆくまで泣きました。私は人のいない家に一人おる事が出来ず、又実家に戻りました。

十二月に入つて、ぱつぱつ元氣になつてきた私は、自分の手で亡

くなつた家族の死亡届を書きました。

家族はみんなやさしいいい方ばかりでしたのに、何の罪があつてこんな破目におちてしまつたのか、一時は生きる望みも失い、一人生き残つた私は悲しくて悲しくてなりませんでした。いつその事、家族みんな一緒に死んだほうが幸せであつたと、思い、人から、あなた一人でも生き残つてよかつたと慰められると、かえつて恥しくなりませんでした。

終戦で世の中も変わり、人間の考え方も変わつてきて、ようやく生きてよかつたと思うようになり、自分の使命感も持つたのです。

終戦のよく年の六月、親戚の方々の進めによつて先夫のいとこ（現在の夫）と再婚して全滅した家を継ぐことになり、現在、ささやかながらも一家そろつて、健康で幸せな生活をしていますが、やはり戦前の大家族の中で、楽しくくらした事は忘れる事が出来ず、みんなが生きていればどんなに幸せであつたかと、思わずにはおられません。

毎年、お盆のにぎわいが聞えてくると、亡くなつた家族の事が思い出されます。その頃が多く「くなつたからです。

私はお盆の供え物をするたびに、当時が思い出されて泣けてくるのです。

人間が生きている限り又と戦争をおこさぬように、人類の幸福と世界の平和を祈りつつ……。

八、波照間の疎開で死線を越えて

竹富村議 仲 本 信 幸（四九歳）

△疎開の命令を受けて

昭和二十年の初め頃、当時私は、竹富村の村会議員をしていたの

で、登野城の大浜家（信泉の生家）を宿していました。

ある日の朝、竹富村長の玉盛淳博君がやってきて、

「波照間の住民は全員西表へ疎開せよとの軍の命令だから、その手配をせよ。」と言つた。私はおこつて、

「何を言うか。君は波照間の千七百名の住民の食糧と医薬品を準備してのことか。」

と聞きかえしたら、「それはない。」と言つた。「バカを言うな、

それもないで君はそれを引き受けたのか。」

「軍命だから仕方はない。」

「では君は軍命だからと言って、千七百名の人間を死にに行けといふのか。西表島はマラリア地帯だというのに、その準備もないで、そこに行けど言うことは、死に行けど言うことと同然だ。敵軍が波照間島に上陸することはないと想うが、例え上陸したにしても、住民を全部殺すようなことはないはずだ。

たとえ殺されても、戦つて死ぬなら潔いがマラリアで苦しんで死ぬのは忍びえない。

住民を守るはずの村長が、その対策もないで疎開を引き受けるとは何ごとか。それでも行けど言うものなら、行く前に君を殺して行

く。」と言つて腕をふりあげたら、おどろいて靴を片足捨てたまま逃げて行つた。

その日の午後、護郷隊の波照間担当の指導員の山下寅夫（本名は酒井喜代輔）がやつてきて、「君は官崎旅団長の命令に従わないといつているらしいな、何たることだ。」とかかってきた。

「何を言うか。君は波照間の住民を守るために、護郷隊として来てはいるはずなのに、波照間の住民を死に行けと言つたのか。住民を守る気持ちがあれば死に行けということは承知できないはずだ。君は旅団長を説得したか。すでに慶良間は米軍によって占領されている。米軍はバカでない限り、逆戻りして八重山に上陸するはずがない。上陸するなら本土に向かつてするはずだ。今頃になって波照間に上陸するから、西表島に疎開せよとは非常識な話だ……」

と、山下にきつく言つて返した。すると、旅団長は返事に困つたのか、三日ほどして、また山下がやつて来て、「旅団長に話したら、君の言うこともよく理解できるが、慶良間島に敵の潜水艦が上陸して島の有力者をとらえ、日本軍の配置がもれただので、たやすく陥落したのだ。八重山にもそのことがおこらないと限らないので、日本全体のため、また八重山全体のために、波照間の住民は涙をのんで、犠牲になつて是非引き受けてくれとのことだ。」

と嘆願するのでやむなくそれを受け、島で協議することにした。

「行くことならマラリアの少ない由布島を指定してくれ。」と申し出たので、山下もそれを受けた。

△島民の周章狼狽するなかで

疎開のことが島に伝えられると、島民はおどりいた。当時、台湾沖海戦で波照間の上空は毎日のように飛行機が飛び、砲撃の音が西南方の海上に聞え、夜になれば海上からサーチライトの光がひつきりなしに立ちのぼり、また墜落された飛行機が火をふいて海中に墜落する様子が目の前のように見えた。

そのような情勢のなかで、もうその時がきた、早く疎開した方がよいと思う者、私のようにマラリアをおそれて疎開に反対する者、などさまざま、周章狼狽の様相そのものであった。

そのようななかで疎開についての字民集会が持たれた。私は波照間には、洞穴が多いので、空襲や艦砲射撃にも心配はない。また、すでに沖縄に上陸しているので波照間に上陸することはない。たとえ、上陸したにしても波照間の洞穴には、全島民入ることができるので、何でマラリアの地にわざわざ死に行くのか。と言うことでも字民を説得したが、山下の威しの前には、軍の命令だから仕方がないと考え、また大多数は空襲や上陸を恐れてもうその時が来たと思つていた。

結局疎開することになった。ではどこにするか、と言うことでもめた。私はマラリアのない由布を主張したが、部落の役員には由布は遠いので鹿川湾から輸送するのに困難である。また小浜島に近いので、空襲や上陸の恐れがある。南風見は近くもあるし、洞穴も多いので空襲にも心配がない。耕地も広いなど主張する者がいて、意見がまとまらなかった。私は南風見はマラリアの発生地でもあるし最もマラリアの多いところだから、そこに行けば空襲でやられる

前にマラリアで全滅する。生命が欲しいので疎開するのだ、南風見に行けば、死にに行くようなものだ、と主張したが、マラリアの恐しさを知らない島民は南風見に賛成する者が多数だった。

私は富嘉部落（私の部落）の人々に言つた。「南風見に行くと、まちがいなく全滅する。南風見の中でもできるだけ西の方の小浜（ナイヌ浜とも言う）にはマラリアが少ないので、そこに行つてできるだけ山の上方に、小屋を作った方がよい。」と進言したがそこにはかやがなくて困る、と言う声があつたのでそのことが心配なら、私の船を無料で貸すからそれで南風見のカヤウチバンタンでかやを取つてきてはどうか、とのことで皆も承知した。ところが、富嘉部落民の一部には、「もし、富嘉部落だけ字民の協議を破つてそのようなことをするか、という声が出たらどうするか。」と言う者もいた。

「協議は法律ではない、協議を破つたと言つて罰する理由はない。私の進言によって富嘉部落は最も西側に疎開することになったから、私が全責任を持つ部落民は心配する必要はない。」と言うことで部落民を納得させ、富嘉部落は南風見の西端に疎開することになった。

疎開をすることになつたら全島民その準備にかかつた。食糧は班ごとにまとめられ、荷作りなどすべて班単位に準備が進められた。マラリアにそなえて、ヨモギ、ニンニクを大なべに入れてせんじ、あめ状にしたエキスを作つて広口びんに入れ、健康増進と胃腸病熱病治療にそなえた。また、黒なまこをくん製したものを作り、栗を入れてせんじたものも用意させた。漢方療法を知つていたこと

が幸いであった。

△軍が家畜を徴用

疎開が開始されると、軍は波照間の豊かな家畜を目あてにその徴用にやつてきた。

当時波照間では、私が畜産組合長をして、その増産奨励を行なつてきた。

就任当初は牛は三百頭しかいなかつたが、疎開前は八百頭へ、豚七五頭から四百頭へ、にわとり一千羽から五千羽へと増産がめざましかつた。特ににわとりは全郡一の豊かさで、全郡の卵の需要を波照間の卵で満たしており、「卵は波照間」として特に知られていた。

運搬船が石垣港に着くと卵を求める人々が集まるほどであった。

徴用に来たのは、軍の獸医広井少尉であった。日本軍は横暴で、島の住民に向つて抜刀しておどし、家畜の徴用を命じた。

彼らが来た日、当時は空襲がはげしかつたのでヤーグ（地名）の洞穴の中で全島の家畜の屠殺、処分についての協議が行なわれた。「君たちは西表に疎開することになつてゐるが、西表に持つて行ける家畜は持つて行きなさい。持つて行けない分を取るために來たのだが、どうするか。」と広井少尉が言つた。

回答がはじまつた。私は言つた。

「私たちとは全部持つて行きます。」

「じょうだん言うな、どんなにして持つて行くんだ。」

「ダンベー（大きなテンマ船のこと）を連れてきて、私の船で引っぱつて持つていく。」

「ダンベーが借りられるものなら、何で私たちが苦労してくん製にする必要がありますか。ダンベーに積んで持つて行きますよ。」

「それじゃ、あなたは私たちがダンベーを連れてきたら、家畜を積んで行つても文句は言いませんな。」

「おー言わない。」と言つて、それができるものかと言わんばかりの顔つきであった。それからその獸医は一週間ばかり島に滞在して

「家畜は一匹たりとも残すな、残したら米軍の食糧になるから全部殺させよ。」と日本刀を振りかざして指導にまわつた。

当時島のいたるところに肉だけ取つて残つた頭、骨、内臓が森や洞穴に捨てられ、また肉さえ取らないでそのまま腐らした牛がいたところに捨てられ、その腐敗した匂いといい、その様相は家畜の生地獄ながらであった。

私は仲間川に空襲を受けて沈没していたダンベーを浮き上がり修理して、私の班の家畜（牛）十数頭を数回にわたつて、夜間運搬した。

軍が徴用した牛は博労の嘉手刈恒優がダンベーを連れてきて、積んで行つた。

今になつて考へると、軍は島の豊かさを見てその徴用のために疎開させたようにも考へられる。

各戸で殺した家畜は、くん製にして疎開地での食糧にそなえた。島内で疎開の準備をすすめながら、一方疎開地には各班から先遣隊を送つて土地のようすを調べ、仮小屋を建て、疎開民を迎える態勢を整えた。

△いよいよ疎開地へ

食糧、医療品、荷物などの準備ができる、いよいよ疎開地へ行くことになった。まず、荷物類を夜間漁船で鹿川湾に運び、そこへ荷揚げしてまた夜間、山道さえないけわしいところを、高潮を見はからつて海岸づたいに重い荷物を南風見に運ぶことは大変なことであった。荷物を運び終つて婦女子を連れて行つた。

私は富嘉部落の私の班（一班）を連れて、由布に疎開した。富嘉部落は私の進言した南風見田の西端に疎開した。

前部落の慶田盛毛牛君は私の言うところには何か理由があるということで、自分の班を連れて富嘉部落の班の西側に移ってきた。前部落の私の親戚の連中は、

「自分の班だけ救つて自分たちのことは考えないのか。」と言うので「私の後について来るなら來い。」というわけで、由布にやって別に班をつくっていた。慶田盛君も私の後を追つて、由布にやつてきた。山下も自分の宿（西島本）の家族を連れて由布にやつてきた。

△横暴な日本兵

由布に来て三日目の晩、私のところに二人の兵隊をつかわして、「与那良田の米作りの労働に出る。」との命令を通告してきた。私は「できない。」とつづねた。その理由は私たちは勝手に来たのではない。富崎連隊長の命令で疎開したのだ。まだ荷物も運んでないし、小屋も作つてない。それを終えてからなら、協力できるが今はできない、ということであった。相手もそれを納得し、沖縄兵であつたので親しく夜遅くまで語り合つて帰つた。

三日ばかりして早く開墾していくものでも植えて、食糧対策をしなければならないと思つて耕地を調べに行つたら、向うから兵隊が一人

何か物を言いたげにやつてきた。

「私は追い返されたのではない。ちゃんと相談をして理由をつけてことわつただけだ。つまり、私たちは軍の命令によって疎開に来たばかりで鹿川湾から荷物もまだ運んでいないし、小屋も作つてないのでそれが終つてからは協力を惜しまないが、今の段階ではできないと言つたまでだ。」と言つたら、くつてかかってきた。

「仲本というものは君か。君はぼくが使つた兵隊をきれいになめて、追い返されたなあ。」とかかってきた。

「私は追い返されたのではない。ちゃんと相談をして理由をつけてことわつただけだ。つまり、私たちは軍の命令によって疎開に来たばかりで鹿川湾から荷物もまだ運んでいないし、小屋も作つてないのでそれが終つてからは協力を惜しまないが、今の段階ではできないと言つたまでだ。」と言つたら、くつてかかってきた。

「君は村会議員をやつているそうだな。」

「そうだ。」

「村会議員たる者が、國家総動員法を知らないのか。」

「では、君に聞くが國家総動員法は何年何月何日に国会を通過したか。知つておられるなら答える。」相手は答えきれなかつた。

「君は、日本兵と言つておりますがそれぐらいのことがわからぬか。日本人ならばそれは常識だ。君はそれぐらいのことがわからなければ日本人ではない。朝鮮人か、支那人かが日本兵に化けてきて、日本兵と言つて我々をいじめているのだ。それならば、きょうは君を殺してやる。おれは琉球の空手の名人だから君を殺して捨てるのはわけない。覚悟しろ。」と言つて腕をめくつて見せたら、顔を真青にして逃げていった。後を追つて行つたら、川にさしかかつたので逃げることができず立ち止つた。すると、今度は相手からやわらかく出て、「君はたばこを吸うか。」と言い出した。

「ではんとにできますか。氣の毒ですな大石さん。島を守るために竹富に来た部隊長自らが部隊を捨てて、田を作つて食べなければならぬと言つて、西表島までくる日本軍とは情ないことですね。ここまで来て米を作るより、なぜ竹富でいもをつくらないのですか。どちらが早く食べられますか。もし、君等がここに来て米を作つてゐる間に、竹富が占領されたら誰が竹富を守りますか。」

などと、さんざん言つてやつたら、顔をまっ赤にしていた。結局、与那良田の水田は半分ずつ分けで耕作することになった。

彼等の土地は私たちが疎開から引き上げるまで結局手をつけてなかつた。

△疎開地での生活

疎開地での生活は共同炊事で、朝食を済ませるとその日のスケジューに従つて作業を分担し、男は開墾や田畠を耕やすし、家畜の世話をし、女は山に入つて薪を取り出し、食糧の調達と食事の準備をしたりした。耕作した地は与那良田では、本原君（小浜出身）の借りていた西島台地の一・五ヘクタールの畑と原野、台地の海岸近くの耕しやすいところにいもを植えた。

田は七ヘクタールの土地であったが、夏であるので時期が合わず整地だけしてあつた。

小浜には煙があるし、開墾する必要がないので、かつお節を三千斤ばかり持つて行つて、大豆と交換してたり、また村会議員の仲盛一雄君や吉野君をたよりに土地を交渉して、吉野君の土地を貸してもらいもを作つた。

疎開地の住居は木の下に小屋を作り、嚴重に偽装し、煙や光の漏

「こんな苦しい時にたばこ吸つておれるか。」
とかえしたら、自分が持つているから上げると言つたので、三本もらつてマッチをつけてやつたら帰つて焼いて帰つた。彼は伍長であつた。私はそれから開墾地に火をつけて焼いて帰つた。
それから四日ぐらいして竹富の大石部隊の曹長が前の伍長の行為をあやまりにやつてきたので、「君たちは兵隊と言つて住民をばかにしている。住民を守るためにきた部隊だはずなのに住民を酷使し、苦しめるとは何事か。」
と、しかつてやつた。彼は曹長だけに、物事は知つていたので、ついにあやまって帰つた。ちょうど富嘉部落の本比貞吉君が、彼の部隊に所属していたので、貞吉君に「君のおじさん」という人はおぞろしい人だ。あの人にいろいろ教えられてきた。八重山で、あんなかしこい人に会つたことがない。」と話していたとのことである。

しばらくして、部下だけでは詫得できず、これでは与那良田の水田の耕作ができないと思つたのか、大石部隊長自ら、前に来た曹長と、他に二・三の部下（伍長は来なかつた）を連れてきて、「与那良田は自分たちが水田にするから、君等はフネラに行きなさい。」と言つた。

「とんでもない。私たちは富崎連隊長から、疎開せよとの命令を受けたとき、耕作できる土地があれば耕作してよいとのことで、疎開を承知したのだ。この辺で田にできる土地はひとつも耕やすしてないではないか。今までできることはないのに、この与那良田の広い土地をあなたたちだけでかかえこむとはどういうことか。あなたたちの力

れには特に気を配った。住居の近くに防空壕をつくり、空襲の時は私は木にのぼり、頭だけ出して大きな声で飛行機の動態を皆に知らしたものだ。直接由布を目標にした空襲はなかったが、小浜への余波を受けて流弾が来た。空襲で死んだ人は一人もいなかった。

海岸に敵が上陸したときにそなえて、山奥にも避難小屋を作れと村役場から指示があつたので、古見岳の前の川の上流に避難小屋を作つて食糧を分けて運搬し、番人を交替でつけておいた。

臆病者はそこへ行きたがつた。湿地地帯だから床を高くあげ、食糧と寝具を置き、マラリア蚊が入らないように、山のピバージを小屋の隅に燃やしてくすぶらした。

そこは人里離れた山の中腹にあったので、近くにいのししが子どもを産んでおり、夜間いのししの親子連れがしばしばやってきたものだった。

由布においてはマラリアにかかった者はほとんどいなかつたが、小浜に農耕に渡つた者の七名がかかつてきただ。幸い漢方療法を知つていたし、島から準備してきた漢方薬が役立つて、一週間でなおつた。南風見では八〇余名が現地で死に、悲惨なものであつた。

与那良田を耕やすためには人手だけではできないし、また、マラリアにかかつたら人手だけでは農耕できないので、西表の護郷隊に役牛を連れに行つたとき、終戦になつたとの知らせを聞いて、引返した。

早速、南風見田、由布を行つて、終戦になつたので空襲の心配はないから、引上げる用意をしようと伝えた。

島には牛がないので農耕ができないし、繁殖ができないので由

布にいる本原君の雌牛一頭と、与那良田のいも（収穫はまだやつてなかつた）と交換し、また小浜に渡つて雄牛一頭を求めた。

小浜の部隊もまだ終戦を知つていなかつた。再び竹富に渡り雄牛を求めて由布に帰り、皆におくれて、最後にイカでんま船で帰つた。

引上げは私の漁船進幸丸二号と昭洋丸、大福丸の三隻で、波照間の疎開民を全部運んだ。

私の漁船の進幸丸一号は古見の後良川の奥に二号は古見の岩陰に偽装して避難させておいたが、岩陰のものは空襲を受け、爆弾投下されたが、直撃を受けなかつたので持ち上げられただけで無事だつた。

第一号は新鋭船であつたので、終戦直前台湾から食糧運搬のために徴用されて台風にあい、なれない兵隊が操縦していたので遭難し、兵隊はその船を捨てたまま帰つてきた。

台湾でそれにたずさわつた巡査は日本人であったので人命救助のお礼にその船をもらひうけ、修繕して、ヤミ貿易で与那国にも二回來たようであるが、マラリアのため倒れていたので、取り返しに行くこともできず、そのうち、長崎でヤミ貿易で接収されたとのことである。その船については補償も何もない。三万五千円の小切手をその補償として、もらつたが、當時、銀行に現金がないとのことでもらえず、そのうちに米軍の統治下になつたのでそのままになつている。

△飢えとマラリア

半年振りに島に帰つてみると、耕地は荒れ果て、農作物、家畜は

全滅でその様相は荒涼たるものであつた。それに飢えとマラリアで慘たんたるものであつた。

荒地を耕やすためには、牛を使わなければならないので、小浜、竹富から連れてきた牛を班に与え、豚は由布から買つてきただので、それを繁殖用として班に与え、また、疎開に行く前に妊娠していたので、畑に放つておいた玉城家の母豚も九頭の子を産んで、大きくなつていたので、繁殖用として共同飼育することになり、それから繁殖させた。

そのうちにマラリアがひどくなり、この島は生地獄そのものとなつた。特にひどかったのは北、名石、南の三部落で、家族全員マラリアで倒れ、十七名の家族から一人生き残つた大泊家や家族全員マラリアで倒れているので葬式できず死後三日過ぎて庭の防空壕に引きずつて入れた浦仲家などのようすは実に悲惨なものだつたと言わされている。当日は毎日のようにマラリアで人が死に、なかには、一日に一家で二名も死ぬということがたびたびあつた。葬式も家族に元氣なものがいるときは幸いであったが、なかには家族全員倒れているので、他人を頼んできて葬式したり、二、三日過ぎて葬式したりすることもあつた。北部落の新里じいさんは一人者だから誰も見てあげる人もなく、死んでから三週間にわたって衛生班が見つけて葬式した例もある。

その間に私も栄養不足と無理が重なつて、マラリアにかかり、十二月頃には重体になつていていた。記憶のもうろうするなかで次のように手紙を竹富町長宛に書いた。

「波照間では、マラリアで全島民死ぬか生きるかの事態になつてい

る。このようにさせたのは軍と村役所の罪である。それなのに村役所からこの窮状調査になぜ来ないのか。波照間の全島民を見殺しにするつもりか。この事態を救済しないものなら私は今マラリアで重体になり苦しんでいるが回復したら近いうちに波照間から二十名の青年を連れて行って私が先頭になつて村役所と農協をたたき割り、生き残っている軍人の頭をたたき割りに来るから覚悟しておけ、こんな事態をどのように救済するかを考えておけ……」

という内容の手紙であった。

それを受けた村役所と宮崎旅団長は急速救援隊を送つてきた。それは食糧班と衛生班に編成され、食糧班は石垣から食糧を集めて持つて来て、それでおかゆをたいて病人を見舞つたりしてまわつた。衛生班は治療と予防対策にあたり、死人をかたづけたりして、対策にあつた。

宮崎旅団長には疎開の通告を受けたときは反発してやつたが、彼は軍医二名（共に中尉であった）を派遣してもらい、私には彼の私物として米三升と乾燥野菜を送つてもらつた。またその軍医の一人は私のために特別に配置されたと言つて、彼は、「仲本さん、私は宮崎旅団長からあなたの生命を必ず救つて来いと特別に命令を受けてるので私の思うとおりにさせてください」と言つていつしょうけんめい私の治療にあたつてもらった。注射するときは注射針をさす筋肉がないのでものつけ根だけには針をたてられるところがあるがそこは痛いのですがまんしてくださいなあと言つて注射してもらつたことを考えるとよっぽど衰弱していたものと思われる。その後三日目頃から自分で寝がえりができるようにな

つたのでその軍医も「やっとあなたを生かすことができた、これで大任を果して旅団長に報告できる」と言つて喜んでいた。その軍医は一週間ばかり滞在して帰つた。その軍医には深く感謝しているがマラリアのどさくさにまぎれて名前も忘れてしまい申し訳ない。私が決死の覚悟でその手紙を書かなかったら私の生命はどうなったかわからない。またこの島にどれだけの人命が失なれたか知らない。今になつてもあの三日がかりで手紙を書いた当時のことが思われ、書いてよかつたと思っている。

そのうちに一月の末頃には私も元気になり、歩けるようになつたので石垣に渡り、波照間の窮状を杖をつきながら訴えてまわつた。当時私はマラリアでやせ細り、見る影もなかつたので石垣では私だと信じない人もいた。

その時は八重山の日本軍は武装解除され、米軍の管理下にあつたので、三月には八重山駐屯の米國軍政官ラブレス中尉に直接訴え、彼は軍船で三回来島し、食糧品や医療品の配給を受けた。彼は軍人であつたが言語学者で、波照間の方言についていろいろたずねるので私は病後で元氣もなかつたが彼に応答してやつたら、そのお礼に箱詰めにされた食糧品をおいて行つた。

四月には八重山支庁長の宮良長詳氏をはじめ、政府関係の調査員がやって来て本格的な復興対策がなされた。その郡民政府の社会課長の桃原用永氏が波照間の復興対策をどのようにしたらよいかと私の意見を聞くので、私は彼等の来る前から私案を持ってそれに従つて復興対策をすすめてきていたのでそれを示した。それは「復興委員会」を設置して、その中に食糧班と衛生班をおき、衛生班の中に

予防係と治療係を設置して復興対策にあたるというものであった。委員長は提案者である君がやれということで、私がやり、各委員は各部落の班長があつた。食糧班は各戸が農耕ができ、自立できるようになつて三年後に解除した。

その解除式のときは波照間がこの苦境から救われたのはソテツのためであり、それに恩義があるということで、波照間にソテツが初めて伝えられたと言われる大泊の浜の東の岩陰で「ソテツの感謝祭」をした。

衛生班は継続してマラリアの撲滅にあたり、五年後にその委員会を解除した。

この戦争で波照間では疎明とマラリアで、八重山では最もひどい目にあい、一七〇〇名の人口のうち六八〇余名の尊い人命と多くの家畜、財産を失なつた。戦死した者には恩給があるがマラリアで死んだ者には何の補償もない。何と非情なことか。また戦争に徴用されて失なつた私の漁船などにも何の補償もない。また戦前の郵便貯金残金が壹万八千円、生命保険が五千円と一万円の二つ、徴用された船の小切手參方五千円、最もひどい目に合つているのは老後にそなえた年金で、五二歳になれば毎月六十円もらえることになつていたものが、みな水の泡になつてしまい、この年（七七歳）になつてこんなに苦しい思いをして生活している。

老後にそなえた貯金にしろ、年金にしろ、みんな国家のためにやつたものだが今だに何の補償もない。戦死した者には恩給はあるが今なお生きている者には何の補償もない。何と皮肉なことか。補償は生きている人のために、その生命のためにされるものではないの

か。

与那原 孫祐 当時 民防衛隊長
宮城 光雄 当時 青年学校教員
本盛 茂 当時 現地入賞終戦除隊

国家は人民の生命をもつと大切にすべきではないか。戦争中、日本軍が人民の生命をそまつにしたように、今日の國家も人民の生命をそまつにしていいのか。

強制疎開によつて、罪のない住民をひどい目に合わせ、その莫大な犠牲をどのように補償するか。また現にそのために苦しんでいる人民をどのように救済するか。戦後三十年を経過する今日になつてこの問題が未だに解決されず残されていることは実に残念なことである。

われわれはこの戦争の償いを国歴史の統くかぎり問題にしなければならない。そのためにも戦争中の事実を正しく伝え、また眞の福祉国家とは何かを追求しなくてはならない。

歴史はいかに裁くだらうか。

一、夜警団、自警団のできる背景

宮良 終戦直後の社会は、食糧難とマラリアでたいへんなものであつた。マラリアで寝ていても、マラリアの葉であるアテプリン、キニーネもなく、毎日のように死人は続出した。マラリアの熱が下がるのを待つて荒れた畑に芋、ネギなどを植えたりなどしたが、すぐ盗まれるという状態であった。少々元気な者は昼夜の区別なく、食物を求めて、名蔵、川原、ヘーギナなどへ行つた。あつちこつちで食糧のことと、いざこざが絶えなかつた。おまけに現満兵も終戦と同時に戦闘活動はなく村、町に降りてくるようになり、島の人たちと婦女子、食糧の問題で衝突するようになつた。上級現満兵は食糧とかキニーネを横流しきるので、それ欲しさに島の婦女子には体をゆるす者もでるありきまであった。下級現満たちは食糧を求めて、所かまわず芋などを盗んだりした。そういう横着な現満から婦女子を守る、食糧を守るというのが直接のきっかけとなつて、青年を中心に夜警団ができるについた。

宮良長義 当時 小学校長
島袋全利 当時 教員
崎山里秀 当時 教員

八重山「自治政府」樹立の胎動

終戦直後の混乱の中で、八重山には自治政府樹立への動きがあつた。その当時関係していた次の方面に自治政府樹立への動きを語つてもらつた。

だ。それよりもみなで「助ける運動」をおこさないとだめだという

ことで、大川のホンナヤー（本名屋）に青年団、農民が集って、その対策などを話しあつた。当時山城興常さんの所に多くのいろいろの物があるというので、その物をとってきて、困っている人々にわけあたえようなどと話しあつた事があつた。そういう青年団の活動が発展していくつて夜警団となつていったよう記憶している。

それから長義先生が現満から婦女子を守るため自然発生的に夜警団ができると話しておられたが、もう一つ、兵役時代に将校にいじめられた腹いせも手伝っていたのではないか。ぼくは幹部候補兵として現地入隊したが、部隊内で将校たちは、八重山民謡など軽べつする発言などよくやつた。あまりしゃくにさわるので文句をいったことがある。

「ほんとに八重山の防衛にきているなら、島の人々の生活の中にとけこんではじめて、島は防衛はできる」と偉らそうに言つたら、にらまれて、ひどいめにあつた。また現地入隊者を差別していた。東畑という副官が沖縄人をスペイ扱いにしていくということなどもよく聞いた。八重山、沖縄の人がしかられると腹わたがにえくりかえるような怒りに燃え、なみだを目いっぱいかべ抗議しようとするがふるえてできず憤まんやるかない思いで、幹部候補兵としての悲哀を感じさせていた。どうしても上官になつて下級の兵隊たちをかわいがらなければならないと、沖縄の人がいじめられるごとにそう思つた。

島袋 たしか当時は警察の機能は停止し、支戸長代理翁長さん一人煙という副官が沖縄人をスペイ扱いにしていくということなどもよく聞いた。八重山、沖縄の人がしかられると腹わたがにえくりかえるような怒りに燃え、なみだを目いっぱいかべ抗議しようとするがふるえてできず憤まんやるかない思いで、幹部候補兵としての悲哀を感じさせていた。どうしても上官になつて下級の兵隊たちをかわいがらなければならないと、沖縄の人がいじめられるごとにそう思つた。

島袋 たしか当時は警察の機能は停止し、支戸長代理翁長さん一人煙という副官が沖縄人をスペイ扱いにしていくことなどもよく聞いた。八重山、沖縄の人がしかられると腹わたがにえくりかえるような怒りに燃え、なみだを目いっぱいかべ抗議しようとするがふるえてできず憤まんやるかない思いで、幹部候補兵としての悲哀を感じさせていた。どうしても上官になつて下級の兵隊たちをかわいがらなければならないと、沖縄の人がいじめられるごとにそう思つた。

／益人は、オモトから自由かつてに運び出した。軍の発電機等、各種機械、器材は、利権屋に横流しされた。一部特權階級がつくられつあったのである。軍の現地自活にとりあげられた畑は、元の所有者に開放されず、一部に横流しされた。まだ隣りでは、マラリアでやつれ、栄養不良になり、常時、おなかを空かしているのに、こういう状態を野放しにしてそれでよいのか、「平等に生きていくる確実な社会にしなければならない。自治政府をそのためにつくる」という声があつちこつちから出され、しだいにひろがつて、青年、壯年たちが、宮良長義氏、宮城光雄氏宅によく集つてその準備にとりかかつた。

宮良 私が黒島から帰つてきたら、私の家に糸州長良、大浜用立、富良高司、富良孫良たちがきて、このままで八重山はたいへんなことになる。早くどうにかしなければならないという事で自治会結成の話がだされ、その結成準備会を宮城光雄氏宅でもつた。

島袋 十一月ごろだったと思う。宮城光雄氏宅に集つた結成準備委員は、宮良長義、糸州長良、安室孫利、大浜用立、宮良高司、屋嘉部長佐、浦添為貴、宮城光雄、亀谷長行、崎山里秀、本盛茂、内原英勝の諸氏たちであった。そこで自治会の会長を宮良長詳、副会長に、宮城信範、吉野高善氏らにやつてもらおうと話しがきまり、本人の了承を得るため、二回、三回と交渉をもつた。その結果、ようやく宮良長詳氏は重い腰をあげてもらつた。副会長候補もなかなか引き受けもらわなかつたが、十二月十三日の吉野高善氏で最後の準備委員会をもつて引き受けもらつた。

そして十二月十五日八重山建設のための那民大会が八重山館（現

いた。畑はあらされ、家もあらされ、現満は現満で婦女子と懇ろな関係を結ぶし、兵役時代のうっふんはある。食糧はない。そういう中で、自然と青年が中心となって、その解決のため夜警団組織をつくりた。十月ごろには、宇登野城、大川、石垣、新川に、夜警団組織ができた。

与那原 登野城の夜警団長は石垣信良氏で、登野城の玉那酒屋が詰め所であった。

大川は島袋全利氏で高シップ（今のバンガローの所）、新川は、龜谷長行氏で前乙婆お獄の前（新川公民館の所）、石垣は与那原孫祐宅であった。主な仕事は、現満から婦女子を守ること、食糧の略奪を防ぐこと、盗難の予防などであった。警ら場所は農学校の後の水道附近、護岸ばた、登野城の東などだった。夜警団は、三尺、六尺棒を護身用にもち、よからぬ者がいると、ティフキ（指ぶえ）を鳴らし、四方八方から攻めて来て、逮捕するという風であった。

二、自治政府をつくる動き

崎山 夜警団が市街地周辺を夜警するだけで、社会の混乱が解決する筈がなかつた。八重山がマラリアから解放され、生産を取り戻し秩序ある流通を回復しなければならなかつたのに、貨幣は役にたたなくなりつつあった。小中学校の校舎の木材、かわらを部隊は、オモト山中に兵舎を作つて持久戦に備えてあつたが、元氣で輸送の利

在の万世館）で催され自治会が結成された。

宮城 弁士は宮良長義、潮平寛保、安谷屋長能、宮城光雄等の各氏が熱弁をふるつた。「為すことがないからといってマラの引き金ばかり引くな」という敗戦将兵に対する告発や、食糧問題、自治政府への抱負などが各弁士たちの内容でした。会長、宮良長詳氏、副会長、宮城信範氏、吉野高善氏の両氏が選ばれた。

与那原 自治会の最初の仕事は自警団の編成でした。十二月十七日だつたと思う。宮良長詳自警会長は、夜警団長の私を呼び、「外の三字の夜警団長は、いずれも本職は教職である。君は自由な身だから四か字の夜警団をまとめて、自警団を作り、自警団長になつてくれ、いざれは正式の自治政府機構ができると警察活動も行なわれるようにならうがそれまで、あなたは、警察署で、自治警察長となつてやつてくれ」ということで自警団が生れた。もう戦争は終つた。軍人でなければ人間ではないといふ時代は終つた。軍人は軍人ではない。食糧を持った軍人が婦女子に飢えた狼となる。「婦女子を守る」というのが自警団の第一の任務であった。何しろ、軍は三ヶ月余の食糧をもつてゐるし、キニーネももつてゐる。郡外からきた兵隊は八八〇〇人いた。その八八〇〇人の軍から婦女子を守るということはなみたいていのことではなかつた。

十二月十七日自警団が結成されるとすぐ市街地をデモ行進した。国民服にキャバンをはき、警察署に集まり、三尺、六尺棒をもつて「自警団が出来たので住民は安心せよ。」

「軍はかつて婦女子をいじめたりするな」との示威行進をした。そうとう意気込んだ。自警団は、無報酬で各字（登野城、大川、石

垣、新川）から有能な青年が警察署に集り、夜十二時前と後の交替制で、パトロールした。自警団結成以来わずか二週間足らずの間に、私は四〇人あまりの軍人を説諭した。「あなたたちも妻子がいるでしょう。島の婦女子も夫が居るのだ。娘らはこれから日本の宝だ。よからぬことはしないようになるとこんこんと説諭した。中には兵役時代、よくいじめた将校等がいた。一晩中留置場に放置して、蚊のえさにした時もあった。こういう時に反省させなければその機会がなかった。宮良長詳会長は「君がまちがった事をしても、自分が責任をとるので思いきって、八重山治安のためがんばってくれ」といわれ、大いに胸をはって仕事をすることができた。

宮良 自治会の事務所は、元地方庁倉庫の部屋だった。そこで自治体活動の計画をねっておった。ところが十二月二三日、南部琉球米国海軍軍政最高執政官チエイス少佐一行が来島し、八重山支庁で自治会幹部と会い、八重山の事情を聞いた。そして八重山の民意の結果の形で軍政八重山の代行機関の首長を選び推薦するようについて事で、十二月二七日、自治会役員、町村長、部落会長、各種団体長を招集し、石垣町役場会議室で、選出会議を開き、宮良長詳氏を選出した。

翌二八日チエイス少佐は、宮良長詳氏を八重山支庁長に任命し、

三〇日、総務部長宮良長義、経済部長幾野伸、警察署長平良專紀、衛生部長吉野高善、事業部長崎山英保、郵便局長奥平朝親、文化部長安里栄繁氏等の諸氏が決った。

情勢はすでに日本帝国主義の支配から、米国軍政支配へと變つて

いたのである。そういう情勢の中で、宮良長詳支庁長は、住民の立場に立つて八重山の行政にたずさわった。

沖縄戦八重山関係年表

(一九三〇年～一九四五)

- | | | |
|---------------------------|------------------------------|---------------------------------------|
| 一〇月 | 一九三〇（昭和五）年 | 一九三八（昭和一三）年 |
| 一月 | 日本教育労働者組合八重山支部結成 | 三月三一日「國家総動員法」制定公布 |
| 一月 | 沖縄教育労働者組合結成（略称O・I・L）二月弾圧をうける | 一九三九（昭和一四）年 |
| 四月 | 「重要産業統制法」制定 | 七月八日「国民徵用令」公布 |
| 九月一八日 | 満州事変勃発 | 一二月一日政府、全国における白米使用を禁止 |
| ※この頃、教員・村吏員の「給与不渡り」問題激化する | | |
| 一九三一（昭和七）年 | 一二月 石垣町登野城小学校教員一〇名検挙される | 五月一五日 沖縄県「國民思想指導者会議」 |
| 一九三四（昭和九）年 | 六月 一日 文部省に思想局設置 | 五月二六日 国民精神総動員沖縄県本部の新設 |
| ※この年、国防婦人会生る | 一九三五（昭和一〇）年 | 九月二日 日本全国に部落会、町内会、隣保班、隣組等組織される |
| 一九三七（昭和一二）年 | 一二月八日 日本軍真珠湾攻撃 | 一〇月一二日 大政翼賛会誕生、一二月に大政翼賛会沖縄支部発会式をおこなう。 |
| 七月七日 | 日中戦争始る | ※この年、興亞奉公日を制定し、防空訓練実施を始める。 |
| 九月一二日 | 政府「國民精神総動員実施要綱」発表 | 一九四一（昭和一六）年 |
| ※この年電燈料二割値下問題で石垣町民大会開かれる | | |
| ペーを着用 | | 三月一日 「國民学校令」公布 |
| | | 四月一日 「生活必需物資統制令」公布 |
| | | 九月 西表島船浮要塞建設、初代司令官に下永憲次大佐命課さる |

一九四二（昭和一七）年

二月 二日 大日本婦人会結成

二月二一日 「食糧管理法」公布

はじめて日本軍下永部隊が西表の内離に駐屯

三月 八日 日本全國における金属の強制回収実施

六月 五日 ミッドウェイ海戦で日本艦隊挫折

一二月一七日 大浜国民学校北の松林で全校生避難訓練実施

一二月二三日 大日本言論報国会創立

一九四三（昭和十八）年

二月 一日 大浜国民学校で下永部隊長、時局講演会開催

五月三二日 國民徵用援護会設立

六月二五日 政府「学徒戰時勤員体制確立要綱」決定

七月 二日 大浜国民学校で対熱強歩訓練実施

七月二〇日 「國民徵用令」改正、徵用人口、労働時間など増加をはかる

一九四三（昭和十八）年

七月三〇日 日本全國女子学徒動員決定

一二月二四日 観音寺部隊、はじめて石垣島ヘーギナーに駐屯

一二月 大本營、絶体国防の総深強化のため南西諸島及び

台湾の防備強化

※この年、大浜及びヘーギナー両飛行場建設作業開始、經濟決

戰婦人会結成、各町村部落で防空訓練強化、國防獻金・恤兵

獻金・飛行機獻金等相次ぐ、生産拡充稻刈奉仕作業隊活躍、

七月三〇日 日本全國女子学徒動員決定

一九四四（昭和一九）年

一二月二四日 観音寺部隊、はじめて石垣島ヘーギナーに駐屯

一二月 大本營、絶体国防の総深強化のため南西諸島及び

台湾の防備強化

※この年、大浜及びヘーギナー両飛行場建設作業開始、經濟決

戰婦人会結成、各町村部落で防空訓練強化、國防獻金・恤兵

獻金・飛行機獻金等相次ぐ、生産拡充稻刈奉仕作業隊活躍、

一九四五（昭和二十）年

一月 一日 石垣島飛行場に空襲

一月二三日 民家に初めて爆弾投下される

二月一九日 米軍の硫黃島攻略作戦始まる

三月一四日 文部省、決戦教育措置発表

四月一日より一か年間全國の学校授業停止を決定

三月二十五日 沖縄作戦開始、連続空襲始る

三月二六日 沖縄県立農学校各校生徒、鐵血勤皇隊或いは通信

隊等を編成各部隊に配属

誠第十七飛行隊長伊倉堂用久大尉（登野城出身）

ら十名、慶良間沖の米艦船に突入、特攻の魁とな

る

※この頃から空襲激しくなり、避難、疎開が始まる。三月下旬

旬帰蘭住民は上原、船浦、伊武田に、四月初旬、波照間住

民は西表の南風見田（一部は古見、由布）に避難（第一次

避難）

一二月 一日 沖縄、非常食糧整備週間はじまる

一二月 沖縄各地に緊急特設挺身隊が結成される

一二月 石垣島海軍警備隊司令井上乙彦大佐着任

※日本陸軍部隊が各学校に駐屯したので児童生徒は疎開地で

石垣町畜耕艇身隊誕生

一九四四（昭和一九）年

一月 一日 沖縄県農業会発足、農業統制強化される

三月 一日 船浮要塞司令官更迭、丸山八東大佐命課さる

三月二二日 南西諸島防衛のための第三十二軍編成発令、初代

軍司令官に渡辺正夫中将親補

五月 一日 官崎武之少将、独立混成第四十五旅團長に補任、

先島群島守備担任を命ぜらる

五月一一日 山田部隊が駐屯して自保飛行場の設営が始まる

六月 一日 第一二八野戰飛行場設定隊・石垣島に陸軍（白保）

飛行場設定に着手

六月二七日 独混第四十四、四五旅團主力を乗せた富山丸

（七、〇八九トン）徳之島沖で米潜水艦の雷撃を受け沈没

七月 六日 サイパン玉砕、内南洋のトリデ崩れる

七月一四日 第三十二軍渡辺軍司令官、第二十八師團長柳淵中將に對し主力を以て宮古列島、一部を以て八重山

群島の守備を命ず

八月 三日 三日から九月二〇日までの間に、作戦部隊約六千

名が本土より続々駐屯

八月 八日 第三十二軍司令官更迭、牛島滿中将親補さる

一般非戦闘員の台灣疎開始まる

八月二三日	獨混第四十五旅團の担任区域変更に伴ない、宮崎異少将は八重山列島防衛の指揮を執ることになり、宮古島から石垣島に移動、八重山農學校に司令部を開設
八月三一日	「學徒勤労令」、「女子挺身勤労令」実施
九月	船浮在の重砲兵第八連隊主力、石垣島の守備強化のため、オモト岳山麓方面に移動
九月三〇日	政府「新國民運動実施要綱」決定
一〇月九日	八重山飛行場工事微用の沖縄本島民帰途遭難約五百名の犠牲者出す
一〇月十日	米機動部隊沖縄本島及び周辺離島空襲（十・十空襲）
一〇月一二日	米機動部隊八重山空襲（十二・十三日）
一〇月十五日	台湾沖航空戦
一〇月十九日	神風特別攻撃隊（特攻隊）編成される
一〇月二六日	旅団司令部に於て八重山防衛作戦のための兵棋演習
一一月二七日	戰勝食糧増産推進沖縄本部設置
一二月 一日	沖縄、非常食糧整備週間はじまる
一二月	沖縄各地に緊急特設挺身隊が結成される
一二月	石垣島海軍警備隊司令井上乙彦大佐着任

※日本陸軍部隊が各学校に駐屯したので児童生徒は疎開地で

宮 古 編

砂川 伸宗根
明将 惠勇

四月一五日	海軍警備隊、米捕虜三名をバンナ岳麓で殺害
五月三日	大外支厅長、空襲のため支厅長官舎で殉職
五月十四日	大浜飛行場、米潜水艦による初の艦砲射撃受く
六月一日	石垣島駐屯軍から「官公職員、医師等は六月五日迄に、一般住民は六月十日迄に軍の指定地に避難せよ」との命が町村長を介して下る(第二次避難)
六月二日	状況逼迫に伴ない、官民に避難告示、一般非戦闘員の郊外疎開始る
六月四日	米の配給、一人五・三二キロ
六月八日	第十方面軍司令官、先島群島所在部隊に対し、迎撃勢完整を命ず。第一回決死收穫隊六六名、豊福丸にて鹿児島港より出発。六月半ば帰る
六月一〇日	八重山群島所在全部隊に甲号戦備下令
六月二三日	牛島軍司令官、長参謀長摩文仁山頂で自決 大本營、沖縄での組織的戦闘の終了を発表
六月二六日	第二回決死收穫隊一四七名を派遣、七月半ば帰る
六月三十日	台湾へ疎開途中の石垣町民百八十余名尖閣列島附近で敵機の銃撃を受けて遭難、魚釣島に漂着七十五名死亡、百余名餓死寸前に救助生還す ※この月に、前石垣町長山口盛包氏ら郊外移動中、米機の攻撃を受け死亡、非戦闘員の死傷続出
七月四日	白水で住民救護に関する打ち合わせ会が行なわれる

七月二三日	この頃、避難各地でマラリアが蔓延する 甲号戦備解除、一般民市内に戻る
八月一五日	終戦の大詔下る
八月二十五日	戦闘行為停止下令
九月一日	現地徵集兵復員
一月	本土派遣將兵の復員始まる
一二月一五日	八重山自治会を結成、宮良長詳氏会長に推される
一二月二八日	南部琉球米国海軍軍政府最高執行官チャーチス少佐来島、軍政布告を公布、初代八重山支厅長に宮良長詳氏を任命す